



TITLE:

通信 (京都大學天文臺新館記念)

AUTHOR(S):

CITATION:

通信 (京都大學天文臺新館記念). 天界 1925, 5(55): 263-306

ISSUE DATE:

1925-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160275>

RIGHT:

没頭して居る。これによりて貧者の一燈を學界に捧ぐるこゝ
が出来れば學徒としての本懐これに過ぎない。

新装漸く成れる我が京大天文臺が尊攘堂裏の一隅から頭を
もち上げたのは之を一の表徴と見たい。我が教室は頭をもち
上げて世界の學界を指導しなければならぬ。我が太陽は頭を
もち上げて百億の太陽を睥睨しなければならぬ。(終)

京都大學天文臺平面圖の室觀

A	教官室	G	談話室
B	講義室	H	寫眞暗室
C	圖書閱覽室	J	事務室
D	學生控室	L	小使室
E	實驗室		
F	觀測室		

學位記

滋賀縣 山本 一 清

右者論文大氣ニヨル光線屈折ノ效果研究ノ爲水澤ニ於テ特別裝置ヲ以テ行ヘル緯度變化ノ同時觀測英文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ本學理學部教授會ハ之ヲ授與スベキ者ト認メタリ仍テ大正九年勅令第二百號學位令ニ依リ茲ニ理學博士ノ學位ヲ授ク

大正十四年七月二十日

京都帝國大學

第一一號

てがみ

拜啓

昨日は大變御めいわくをかけました。晝食を食べるのも
忘れて、思ひついた三十三センチの試験を執行してしま
ひました。鏡の表面はエリソン氏のものより多少劣る様
に思ひますけれども、收差の點より考へて、其の結果の
像は殆んき差は無いことと思ひます。實際、自分の豫期
して居た通りの鏡です。

京都の空で、あの鏡ならビケリングやフィリプスの結果
をまかすことは困難でないと思ひます。自分で考へたこ
みだけをまこめて「天界」の原稿に思つて書いて置きま
した。

銀をはがせてしまひましたので此の月中には是非鑛銀の
ために参ります。

伏見野砲兵第二十二聯隊にて

七月十六日

中 村

要

山本先生

松を觀て引返した。

七、上弦の月。窓から眺むる上弦の月は皎々として居た。神氏方で夕食の馳走になつて、午後八時十一分加古川發、同十一時十五分岡山着。直ちに歸宅した。

八、岡山の天。二十五日は山口で雨に濡れ、二十六日は雨の鳥取に着き、二十七日は雨中に汽車を走らせ、二十八日は晴天であつたが夕刻から曇り、二十九日には雨中を冒して福知山で活動見物に出掛け、快晴の夜は一度もなかつたのに、岡上に歸れば快晴六等星迄はハッキリと觀るゝが出来る。聞けば二十五日少雨、二十九日雨で二十六、七、八日はよく晴れて居たこと。山陰京都地方に比して岡山附近の天氣のよいことは、一週間の間でさへ右の通りである。

九、岡山天文臺。岡上に一大天文臺を設置したいといふことは、去大正十年から、天文同好會で叫んで居ることである。先年京都天文臺中村要氏が來岡された時にも、京都で四時望遠鏡がなす仕事を、岡上では三時望遠鏡で十分だと云つて居られた。岡山測候所で觀測された天氣日數、三十ヶ年の平均による一ヶ年間の中、晴天が二百二日四分、晴天で少雨雪、三十日七分、兩方を合して百分率を出すに六十三、八六となつて三分の二は天體を觀測することを得るのである。風穩かなことも内地では其の比尠く、森現測候所長の談による。晝間曇雨天の時も夜分に晴天となること多く且つ霧の如きは一ヶ年中に十二、三回あるの

みで、實に理想的の天文臺の位置であること話された。官公立の天文臺の設置を待たずして、天文同好會で一つ小規模のものを設け誰人でも自由に觀測が出来る様なものにしたのである。而して理想的な新式の大天文臺は官立で、太陽の觀測を主としたものが望ましいのである。

むすび

余は旅行好きである。度々の旅行は大抵豫定の通りを實行して來たのであるが、今度の前後一週間に互る旅行、日數は短かつたが豫想以上に見聞を廣め、到るところで歡待され、愉快に旅行を續けたことを永く心に銘することを得たのである。(をばり)

通信

久しく御無沙汰いたしました本月二日に當臺北市に参り其後南部を巡り内地では見られぬ珍らしい風物に數々接し愉快な旅行を續けました。

恰度高雄の埠頭を歩いてゐた時です正十二時で港内の汽船は一齊に汽笛をならしました。時の記念日であつたのです。自分の影は全く兩足の下に投じたやうでした。

嘉義驛に近い北回歸線標も見ました。昨夕の臺灣日々に見元了氏の談としてこれに關するお話がのせてありました。

「此の標塔は唯々臺灣名所の一つに數へられるのみでなく實に世界唯一の回歸線標として我臺灣の誇りである。これを最初に建設したのは明治四十一年の十月で本島の縦貫鐵道全通式の際に夏至線の通過地點を一般公衆に示

さんが爲に建てたのであつた。熱帶温帶の境界とも云へば云へないことばはないが氣象の上からは必ずしも此の線を兩帶の境界とは限らないからその爲の標塔さば云はない方がよいと思ふ。其後暴風の災に遇つて破損したので大正三年に改築し更に大正十三年の春に第三代目の改築となり圖に見る通り堂々たるものである。

太陽は愈々明日はこゝに達し此の標塔を直上から照らすのが午前十一時五十八分過ぎさなる。

これを最北地點として明後日から南の方へ回り歸るのである。併し地球上に描く太陽の行路は螺旋狀であるから正確に云へば本年の太陽行路の最北端は臺灣ではなく太平洋の真中に當つて、臺灣の午前六時五十分さいふ時である。それにしても一層精密に之を測定するならば北回歸線は毎年同一の所にあるのではない。今では少しづつ南の方へ寄つてゐるがそれは極めて僅かで四年経つても一分さば違はない。云々

當臺北市では唯今始政三十年記念展覽會が催され極めて賑かです。晝は暑いですが夜は極めて冷しく蒸暑いやうな事はありません。南天の星座も美しく雄大な娑座も中天高く這うてゐます。αセントウルス星も地平線低く輝きます。常夏の國では夜さ晝さ別世界なのでせう。

六月二十二日

太陽の北回歸線標に達する一時間前

臺北市龍口町にて

岩崎良

三拜

山本先生侍史

朝ラクロワ氏を博物館に訪れるつもりであつたが、時間が遅れて了つたので、中止。アラゴ通りを歩いて天文臺を訪れ臺長に面會の機を頼んで置いて歸つた。

午後はルーヴル博物館のギリシヤ彫刻を見る——有名なミロのヴィナスなど。

十一月十四日(金)

午後三時、獨りで天文臺を訪ひ、臺長、パヨール氏に面會、息(丁)パヨール氏の案内で本館の社交室や展覽室、又、別館の十三時寫眞鏡や、子午環室など、主なものを見る。さすがに廣くて、大きくて、短時間には見盡せない。今日は一部に止め、夕方、一助手に伴はれて、アラゴ通りのプラン會社を訪ふた、此の會社は昔しのゴーチエ會社を繼いだ有名な天文器械製造會社で、今日見たものの中にも日本から注文の子午儀四つと子午環一臺とが殆んど完成に近づいてゐた。

十一月十五日(土)

寒い。

朝の間、英國旅券局へ行つたり、日本の大使館へ行つたり。午後はイタリヤ街へ買ひ物に行く。

十一月十六日(日)

英子に見送られて、朝十時サン・ラザール停車場を英國行特別列車で出發。午後一時アエブ着、直ちに連絡船に乗り移り、まもなく出帆。可なり揺られつゝ、五時ニウ・ヘザン港着。一通りの旅券と税關検査を終へ、南部鐵道により、六時半ロンドンの拜イクトリア停車場着。近くのベルグラザア・ホテルに入る。

十一月十七日(月)

さにかくロンドンの街々を見ればなるまいと、かたて讀んで置いた案内書の知識をたより、朝食後、パキング宮殿、議院スクエア、拜クトリア堤、ノーザンバ街、チャリング・クロス、トラファルガー・スクエア、ストランド、フリート街、聖ポール寺、イングラランド銀行の順に一巡して、序でに横濱正金銀行や、日本郵船會社へも寄つて、用事をすまし、それからロンドン橋をわたり、トウレー街から電車でグ

リンキチ公園に行く。

公園の中のグリーンキチ天文臺に着いたのは三時少し前。直ちに臺長ダイソン博士に會ひ、暫く話した後、昨夏ダートマス大會の折既に見覚えあるジャクソン氏に案内されて、二十六時寫眞鏡や、二十八時赤道儀や、八時大子午環や、八時寫眞天頂管や、それから立派な社交室なども見た。日食寫眞を幾板か、殊にアインシュタイン問題を最初に觀測した寫眞原板も見せられた。かねて聞き知つて想像はしてゐたが、二十八時の處待のされ方、大子午環の古びた目盛りなどは驚いた。あたらしの有名な天文臺の肝腎な設備を、徒らに英國氣質で保存にのみ力めず、むしろ思ひ切つて改良しなくてはなるまい。(名簿によると、此の天文臺に日本人訪問者の數多いこと!! 自分は今日取り次ぎを待つ間に數へて見た所によると、十月始めから今日までに五十八人あつた——それが何れも日本の天文臺をさへ全く知らないらしい素人ばかり。)

聞いたにまさるロンドンの霧にも驚いた。どうも之れは或る程度まで人工的なものと思はれるのだが……。

たより

教室で教はつたことは、記憶すべからざるもの、如く、そのまゝ學校に置いて來ましたのに、星に對つての面白さのみは、どうしてか、いつまでも胸に生きて居ます。西南の空に大きい光度のを見つけてました。早速、星座表を探して見ますが、見當りません。ハテま考へれば、あゝあれは遊星と氣が付きました。ほんさうに大きい美しい星です。世を忘れ、塵を忘れ、人をさへ忘れて星の研究を御重ねになつて居る方々が思はれます。(TU)

○前七月號の訂正事項

始めての試みで、可なり注意はした積りですが其れでも七月號曆表關係記事に誤まりが左の如く見つかりましたから訂正します。

頁	行数	誤	正
224	上段の4	$x^2 - y^2$	$x^2 - y^2$
225	第四表縦の行	赤 經	赤 緯
227	上段の12	9.8217n はその……	9.8217n n はその……
227	下段左より3	$n_2 + 0.1546$	$n_2 - 0.1546$
228	上段の5	0.5878+	0.5878
240	下段の6	が一つも見えず云々	中の2を木星ののみが
246	3	總日数引日	總日数31日
247	月の擧げ行日	月蝕云々	取り消し
250	3日	.4を四ミリ半だけ左へ移す	
250	24...	右側に 20を記入す	
252	西方極大離角	皆12時間を加ふ	

同好會報

○八月例会 都合により中止する。夏のことで、講師の方も來會者の方も都合は良くない。七月の例会なども既に集る人は少なかった。

○大牟田支部 古賀幹事からの手紙によると、大牟田市では同氏と松田氏が、相變らず、天文の研究と普及とに盡してゐられるといふ。大牟田高等女學校、大牟田市の時の記念日、三池中學、三井炭礦、三池銀行、柳河中學、朝倉中學、同校教員會、大牟田小學校、大牟田市教育會、三池青年會、龜甲青年會、三池鐘紡など、皆、古賀氏の講演を開いたとの由。

○支部新設の傾向 同好會としては會員は今大して増減しない。しかし今の會員が既に熱心家ばかりと見えて、會員数は増えないけれど、各地に支部が増えて行く傾向があるのは嬉

しい。近い中に、高松、福岡、大連、カリフォルニアあたりに支部が出来るらしい。同好會は單に日本の同好會では無い。だから始めから「日本」とか「大阪」とか「京都」とか、乃至、「東洋」とかいふ風の地方的な名を同好會の上に冠せないのだ。いはゞ之れは「世界」の同好會なのだ。——此の頃「何々同好會」といふ名のいろいろな會が出来て行くこと。そして又、わが同好會みたいな言文體の會の規則が出来て行くこと。

○岡山支部六月通信

一、天體觀測會 九日第二岡山中學校で岡山縣下中學校地理科教員研究會の際、二十二日三十日岡山支部で開催

二、天體幻燈十日關西中學校で催された。當日は恰も「時記念日」に相當して居たので、特に時に就いて詳細の説明があつた。

三、天界研究會 十三日宮原幹事宅で催された。

四、講話會 十九日ミカド理學會で講話會が催され、左記の講話があつた。

星の神話	水野 千里氏
火生の生物	大河原憲徳氏
宇宙は有限なり	同 氏

前號から改められた曆表の八ページは可なり多くの讀者からの手ごたへがあつた。前にも書いた通り、直ぐには意味のわかりかぬ部分もあらでうが、毎月の圖や表を比較して見るさ、だん／＼面白いことが氣付かれる

ことと思ふ。圓形の臨廓内に畫かれた毎月の星座の圖は今更言ふ必要も無いほど分りきつたものであるが、次の次のページにある十二角形の遊星運動圖は了解しに要する人々も稀にはあるだらう。しかし、之れは要するに太陽系の各遊星を見下したやうな風の圖であるか否かは、毎月々々比較して見れば、各個の遊星が太陽のまはりを時計の針と反對の向きにめぐつて行く有様がわかり、又、吾々の地球も同様に動いてゐるのであるから、地球から太陽様に見える方角や、各遊星の方角も皆之に分るわけであり。従つて、何星は今が見るのに良いかが、良くないかがの區別まで明瞭に此の圖で知ることが出来る筈である。

あることは残念であるが之れは今後大に注意して誤りを無くして行きたい。前號の書い
甚だしい誤りは七月九日に月蝕があるさ書い
て見たたり、セファイ型の變光星中に肝じんのの
セフェウス座デ星を落したことであつた。全
く申しわけの無い話した。

今月のは京大天文臺の新築記念號であるが、寫眞や圖面など共に、新城、山本兩教授の文をよく讀んで貰ひたい。之れは日本の

天文學界に今まで聞えなかつたたちの聲なのである。日本の天文臺が何時までも一種の憶病風に襲はれて、世界の隅つこの方で青島吐血をしてゐる時代では無いのだ。外國の大設備を羨ましがつてゐるばかりが能ては無い。

「天界」の編輯部に原稿は積まれてある。以前からでも漏らしてゐる通り。事情さへ許せば今すぐにも之れを毎號百ペーシの雜誌にする事が出来る。しかし、實は今の財政が許さないのが情けない。殊に七月號からは毎號五十ペーシを越え、印刷所へ拂ふ金だけでも月々三百圓を突破して居る仕末。しかるに會費の集まりが悪く、今は同好會として可なり借財に苦しんでゐる。近い内に何さか會の組織を改めて、やりたい多くの仕事を安心してやれるやうにしたいものだ。——同好會費を増すか、又は會員の數を増すか、此の二つの方法の何れかによらなければ今の財政難を救ひ出す工夫は無い。會員及び讀者諸氏の御考へを聞きたい。——一寸考へて見て頂きたい。今から五年前、同好會が創立され「天界」が發刊された頃、「天界」は僅か十六ペーシで毎月の會費は二十錢だつた。今は「天界」は百ペシ數が三倍以上にも増してゐるのに、會費は僅か五割しか増してゐないのだ。常識から考へても今の財政が危ないことは分つて貰へる筈である。

[illegible]

第五十五號
 (天界)
 聖詔院前和書師第一號
 (京都帝國大學天文臺內)
 編輯兼發行者 天文同好會
 右代表者 振替貯金大阪五十六番
 京都市下京區西洞院七條南入 山本 清
 印刷所 內外出版株式會社印刷部
 賣捌所 警 醒 社